

神奈川県立博物館発掘調査報告書

第 10 号

梶山遺跡(4)

上台遺跡(予報)

A REPORT ON THE ARCHAEOLOGICAL EXCAVATIONS

BY KANAGAWA PREFECTURAL MUSEUM

No. 10

KAJIYAMA (4)

&

KAMIDAI

神奈川県立博物館

KANAGAWA PREFECTURAL MUSEUM

Nakaku Yokohama Japan

1977

梶山遺跡第4次発掘調査報告

目 次

1. 梶山遺跡第4次調査について	1
2. 調査経過	1
3. 第Iトレンチの遺構・遺物	3
(1) 第Iトレンチ	
(2) 21号住居址	
(3) 22号住居址	
4. 第IIトレンチの遺構・遺物	10
5. 結 び	10

挿図・目次

第1図 発掘区域平面図	2
第2図 第I・IIトレンチ断面実測図	4
第3図 21号・22号住居址実測図	6
第4図 21号・22号住居址出土土器実測図	7
図版1 (1) 第Iトレンチ全景 (2) 第IIトレンチ全景	
図版2 21号住居址	
図版3 (1) 圓形土器出土状態 (21号住居址) (2) 高环形土器出土状態 ()	
図版4 (1) 小銅鏡出土状態 (2) 小銅鏡背面	
図版5 (1) 台付鉢形土器 (22号住居址) (2) 高环形土器 (21号住居址)	
図版6 (1) 台付鉢形土器 (22号住居址) (2) 席形土器 (22号住居址覆土)	

調査主催者.....	神奈川県立博物館長 高橋繁蔵
発掘担当者.....	神奈川県立博物館主任学芸員 神澤勇一
調査期日.....	昭和50年3月12日～18日
報告書執筆.....	神澤勇一・川口徳治朗

1. 梶山遺跡第4次調査について

梶山遺跡は横浜市鶴見区上末吉に所在する縄文・弥生・古墳の3時代にわたる集落址である。本館では地域研究活動の一環として、昭和42~43年にかけ3回にわたり同遺跡の一部を発掘調査した。そのさい調査区域が畠地になっている関係で、耕作の都合と日程の調整がつかず、未調査の所が生じたため補足調査を予定したのであるが、種々の事情で延び延びになり、昭和50年に至ってようやく機会を得たので3月12日から18日まで延7日間、発掘調査を実施した。

第4次調査の主目的は台地東南斜面における集落址の範囲を明らかにすることに置いた。日程の関係もあり、十分目的を達したとは言い難いが、台地上面縁辺よりかなり下った斜面にも、弥生時代後期ならびに古墳時代前期に住居を営んでいることが知られ、また遺物包含層中からではあるけれども、小銅鏡一面が出土するという予想外の収穫を得た。

このほど資料整理が一応終了したので、とりあえずここに結果の概要を報告することにしたい。

稿を起すにあたり、格別なご協力を賜わった地主 小林幸雄、平塚市立博物館 小島弘義氏、同 明石新氏、および明治大学、慶應義塾大学、国学院大学、立正大学の卒業生・学生諸君に厚くお礼申し上げる。

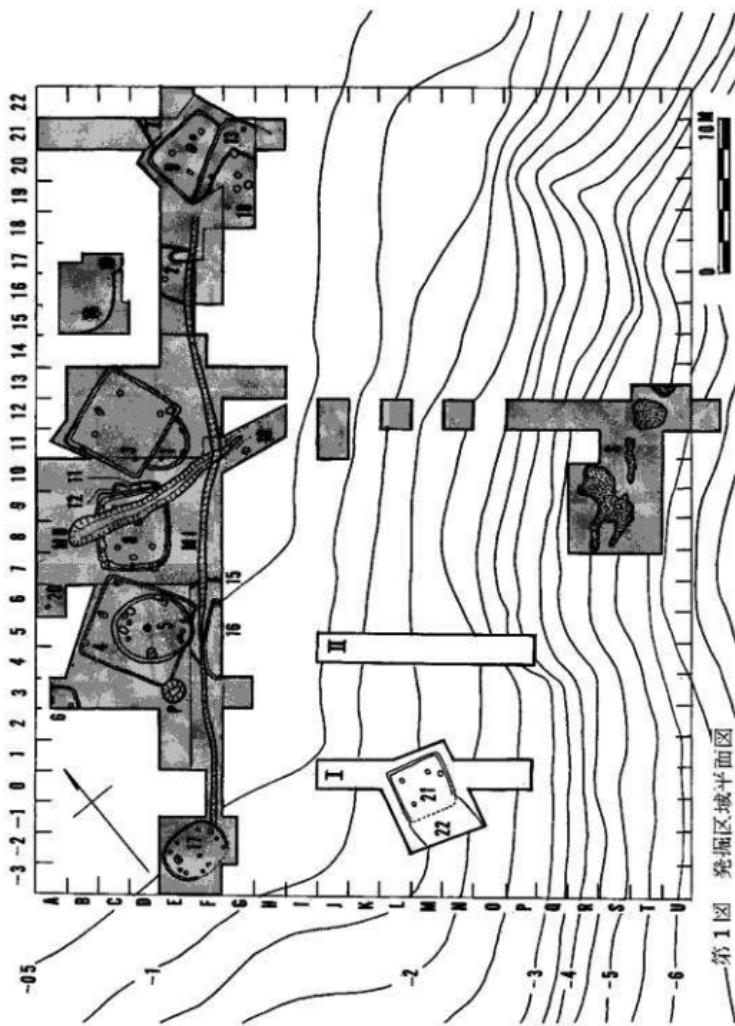
2. 調査経過

遺跡の状況、自然環境および調査区については、前調査の報告書に述べたので、ここでは省略する。^(註)

第4次調査は、前調査のグリッドに合わせて発掘地点を設定する予定であったが、基準点に使用した標柱のうち2本が高圧線鉄塔建替え工事のさい撤去されていることが、直前に判明し位置の復原に時間を要するため、トレンチ法で実施した。発掘区城は、その後の測量により第1図に示した位置になることが知られ、延面積は約76m²である。

本調査では台地上面末端から斜面にかけて、幅2m、長さ14mのトレンチを5mの間隔を置き、2本設定した。名称は西南側のものを第Iトレンチ、東北側のものを第IIトレンチとした。

第Iトレンチでは、中央部において、ローム質黄褐色土層中に黒色土の落込みがあり、住居址の存在が予測されたので南側と東側の一部にかけ6×5mの拡張区を設定して追求した結果



堅穴住居址1個が確認された。出土土器からみて五領期に属すると考えられ、これを21号住居址としたのであるが、床面の南側約3分の1が張り床となっており、下に弥生時代後期の堅穴住居址（前野町期と考えられる）が存在した。この住居址を22号住居址とした。22号住居址は大部分が隣接の畠地にかかるため、一部分床面まで発掘し、確認をするに止めた。

第IIトレントでは、遺構は何ら認められなかった。しかし、本トレントでは東南端の表面下20cmの耕作土下端から小銅鏡一面が鏡面を上に向けて出土した。そこで周辺の状態をみるため、東南方へ80cmトレントを延長したが特別な所見はなく、二次的に存在したものと認められる。

なお、第Iトレントと第IIトレントの中間部分および第Iトレントの西南側については、ボーリングステッキにより調査したが、住居址その他遺構とおぼしい落込み部は全く探知できなかつたので、発掘を見合せ、調査を打切った。

3. 第Iトレントの遺構・遺物

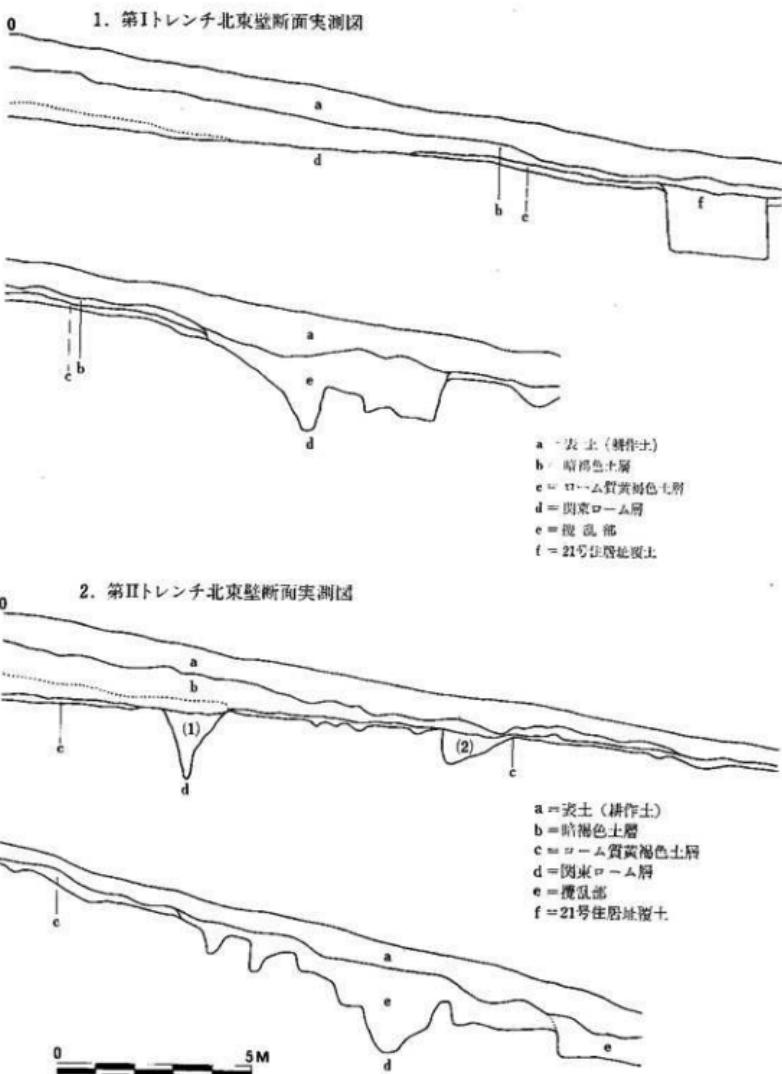
(1) 第Iトレント（図版1—1、第1図・第2図—1）

第Iトレント（幅2m、長さ14m）の範囲はJO～POグリッドにはほぼ相当する。断面実測図（第1—1図）に示したとおり、第Iトレント付近は平均約9°の緩斜面をなし、一定の傾斜を保ち、表土下の各層も同様な傾向をもつ。トレント両端における高度差は、地表面で約2.3mをはかる。

層序は第1層=表土（耕作土）25～35cm、第2層=有機物を含む暗褐色土層5～50cm、第3層=ローム質黃褐色土層5～10cm、第4層=関東ローム層となり、部分により多少差が認められる。

第2層の暗褐色土層は火山灰を含む腐植土から成り、O点より5.5m付近までは厚く堆積するが、斜面下方では5～10cmと著しく薄くなる。また3m付近までは下部に多少黒味を帯びた硬質部があるが、境界は不明瞭であり、上部と本質的な違いはない。第3層のローム質黃褐色土層は、O点から4.2mまでの間には堆積をみないが、前調査及び第IIトレントの所見により部分的消失と考えてよからう。この層は中央部以遠では厚さ10cm内外堆積する。21号住居址の覆土の落込みは3層上面から明瞭に認められた。

トレント東南端付近は、第2層以下が著しく擾乱されており、以下関東ローム層まで振りこんだ断面がそれぞれV字形とU形を呈する2本の溝が存在した。それらは第IIトレントにおい



第2図 第Iトレンチ北東壁断面実測図・第IIトレンチ北東壁断面実測図

てもほぼ同位置に現われており、台地の長軸と平行に伸びていることがわかる。しかし特に遺構と認め得るような形跡を欠き、位置も斜面の蔵に接する畠地の鞋に近いので、開墾時の「根切り」の跡と考えられる。

出土遺物

遺物は表土、暗褐色土層上半部から出土したが、きわめて少ない。加曾利E II式土器、称名寺式土器、前野町式土器、五領式土器その他型式不明の土器破片が散漫に出土したにすぎず、特にすべき所見はない。

(2) 21号住居址

住居址（図版2-1・2、第3図）

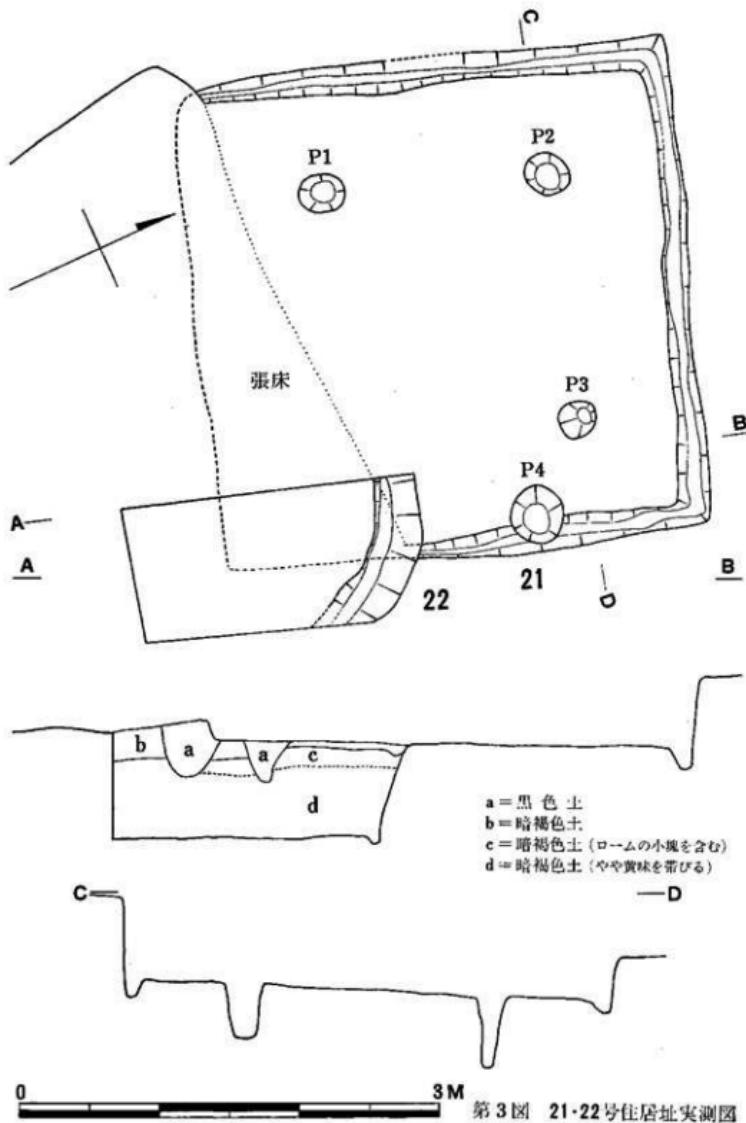
五領期に属する堅穴住居址で、22号住居址と一部重複して存在した。

21号住居址は平面正方形で、東西3.6m、南北約3.6m（推定）の規模をもち、本遺跡発見の同期の住居址中、最も小型である。主軸の向きは、ほぼ南北方向を示し、床面は平均約3°東南側へ傾斜する。関東ローム層を掘り込んで設けられているが、22号住居址にかかる南壁付近のみ張り床となっている。しかし、関東ローム土を厚さ2~3cm貼った薄いものに過ぎず、黒色土の方がむしろ多い。床面はきわめて軟弱であった。

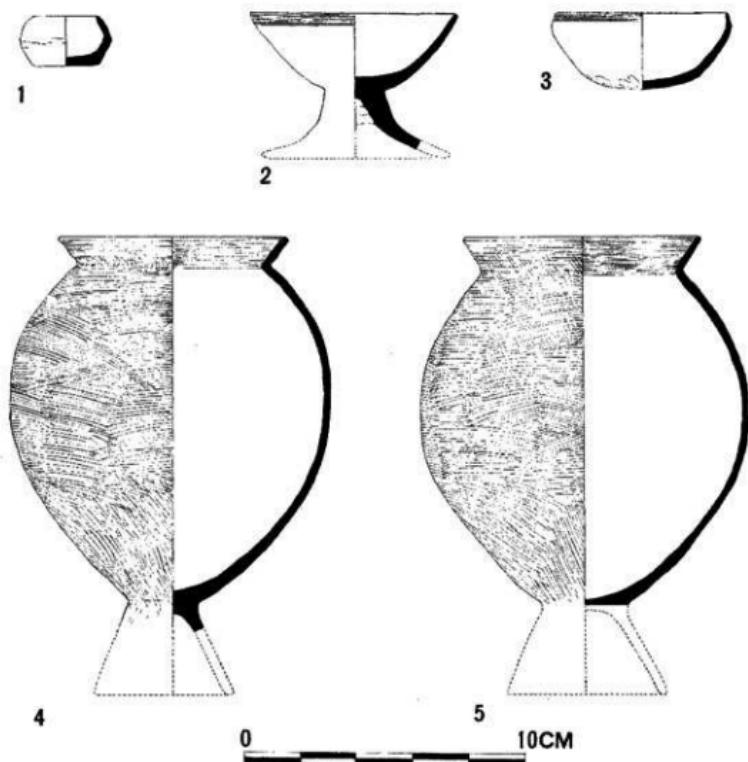
本住居址は斜面に建設されたため、発掘した状態では西壁のみ著しく高く見えるが、東側も本来は暗褐色土層から掘り込んだ壁面が存在したと考えられる（図版2-1）。なお西壁では、堅穴の掘り込みがローム質黃褐色土層上面から認められ、この部分において、床面まで約60cmをはかる。壁はほぼ垂直で、壁に接し、平均15cm幅の周溝がめぐらされている。対象に配置された4個の主柱穴をもつものであるが、住居址重複部分に存在するものは確認不可能であった。

主柱穴P3に近い東側壁面に接して、床面から約50cm掘り込んだ直径40cmのピット（P4）が存在した。主柱穴P1~P3よりも大きいが、位置からみて、出入口の軒に伴う柱穴ではなかろうか。

炉址は検出できなかったが、ピットP4に接した床面上に、径30×50cmの範囲で、厚さ約10cmをはかる焼土の混じる灰の堆積が認められた。しかしそれは部分的で、炉址の形跡もなく、二次的な存在と考えられる。



第3図 21・22号住居址実測図



第4図 21号・22号住居址出土遺物

1 = 小型壺形土器 2 = 高環形土器 3 = 環形土器 4・5 = 台付鉢形土器
(1・2 = 21号住居址 3 = 22号住居址覆土 4・5 = 22号住居址)

出土 遺 物 (図版 5・6、第4図-1~3)

本住居址は床面から平均 10cm まではローム質黄褐色土、それ以上は第3層と同質の暗褐色土が覆っていた。暗褐色土上端から 10~15cm 下までは多量の有機物を含み、著しく黒味を帯びる。

これらの覆土中にも遺物の包含は少なく、勝坂式土器、加曾利 E II 式土器、弥生町式土器、前野町式土器等の小破片が数片ずつと、土錘 5、打製石斧 3、鍬器 1 が出土したにすぎない。

土鍤は土器破片に加工したもので、長軸に沿い2ヶ所に紐掛けを設けた一般的な種類である。5例中、加賀利E II式土器の破片を使用したものが2例、他の3例は中期の土器を使用していることは明瞭であるが、型式を識別し難い。

打製石斧は3例中2例が短冊形、1例は小破片のため形状を察知し難い。

礫器は打製石斧に近い形状を示し、前期の土器に伴うものではないかと考えられる。

住居址床面出土遺物は、その特徴より、すべて五領式土器と認められる。壺形土器、甕形土器、高杯形土器、小型甕形土器等があるが、完形の小型甕形土器（第4図-1）とほぼ壺形を伺い得る高杯形土器（図版5・第4図-2）以外はすべて小破片で形状の詳細を伺い難い。それらの大半は西壁および北壁付近の床面に密接した状態で存在した。

小型甕形土器(1)は高さ3.4cm、口縁部直径4.6cm、底部直径4.6cm。手捏状の造りで、器面の凹凸が著しい。底は浅い上げ底で、一部に黒斑がある。色調は灰黄色を呈する。

高杯形土器(2)は現存部高9.6cm、口縁部直径14cm。東壁に接して存在した灰の堆積箇所から出土した。器内の保存状態が著しく悪く、特に杯部内面はほぼ全面にわたって剥落がある。外面はやや良好であるが、明らかに二次的に火を受けたと認められる斑点を全面に残す。器面は笠削りしたのち、笠磨きを加え、口縁部外面のみ横なでを行なっている。色調は淡褐色を呈する。この土器が火を受けた原因は明らかでない。

なお、21号住居址の下に存在した22号住居址の東壁に接した部分から、五領期に属すると考えられる杯形土器1個（図版6-2・第4図-3）が出土した。21号住居址の床面から26.5cm下方であり、もしP4を柱穴とすればそれに対応する柱穴が存在したと考えられる位置である。この土器の内面にも二次的に火を受けて生じた斑点が著しい。22号住居址に伴う可能性が大といえよう。しかし、高杯形土器(2)と杯形土器(3)が同時期のものとしても、22号住居址には前述のように、二次的な小さな灰の堆積部分はあるが火災の形跡は認められず、その原因は不明である。

(3) 22号住居址

住居址（第3図）

22号住居址は21号住居址の南端と重複している。大半が隣接する畑地にかかり全体を発掘できなかつたので、北東隅に当たる部分、 $1 \times 2.1m$ の範囲を発掘し、床面の存在と時期を確認するに止めた。

本住居址は黄褐色ローム質土層上間に於ける覆土の落込み範囲と、ボーリングステッキによる調査結果からみれば、規模 $4 \times 6m$ 、南北方向に主軸をもつ住居址と推定される。床面は21

号住居址の床面下70cmにあり、非常に固く踏み固められていて、木住居址の範囲もローム質暗褐色土層上面から始まっている。覆土は21号住居址と重複しない部分において、床面上50~55cmまでやや黄褐色を帯びた暗褐色土、その上を多量の有機物を含む黒味がかった暗褐色土が覆っている。張り床部分においては、それに接する覆土の上部、10~15cmまでの間にローム土の小塊が混じる。

出土遺物

覆土上半部においては勝坂式土器、加曾利E I式土器、加曾利E II式土器、前野町式土器、五領式土器の破片がごく少數混在し、ほかに敲石1、鍛器1、土錐2、石製模造品破片1が出土した程度である。

土錐は土器破片を加工したもので、1例は加曾利E式土器の破片を使用している。

石製模造品は劍と考えられるものの破片で、現存部寸法は $2.4 \times 2.0 \times 0.5$ cm。滑石製で整形はやや粗雑である。径1.5mmの穿孔があり、片面に穿孔と2mm離れて穿孔の痕跡が一個所ある。

覆土下部、床面上5~30cmまでは、数個体の土器が押しつぶされたような形で密接して存在し、一部は床面に接していた。発掘した範囲では大型壺形土器、台付鉢形土器の2種類が認められる。この部分から出土した土器はすべて同じ型式的特徴を備え、前野町式土器に比定してよいと考えられる。第4図、図版5・6に示した2例は復原し得たほぼ同大の台付鉢形土器であり、いずれも脚を欠失している。

4は現存部高27.8cm、口縁部直径16.3cm。胴部最大径が中位よりやや上にあり、「く」字形に鋭く屈曲した口縁部の内側に稜をもつ。口縁部内外面を横なで、胴部を刷毛で整形し、中位以上では横に、下部では斜めに刷毛目が走る。器面の凹凸は少ない。焼成は良好で褐色を呈する。

5は現存部高26.2cm、口縁部直径16.8cm。器形と整形状態は4と同様である。

なお、覆土中から出土した壺形土器1例（第4図-3）があるが、前述のように、21号住居址に伴ったものと思われる。高さ5.3cm、口縁部直径12.5cm。口縁部は横なで、胴部は挽磨され、底面に粗い挽削りの痕を残す。器面は内外面とも丹彩されている。胎土、焼成とも良好である。

4. 第Ⅱトレンチの遺構・遺物

第Ⅱトレンチ（図版1—2・第1図・第2図—2）

第Ⅱトレンチは、第Ⅰトレンチと6mの間隔を置き、平行に設定した。範囲はJ4～P4グリッドにはほぼ相当する。貝塚が存在する東南斜面の凹所に接しているため、東南端付近でやや傾斜が増す（平均10°）が、全体的には第Ⅰトレンチの状態と特に異なる点はない。

層序は第1層=表土（耕作土）25～30cm、第2層=有機物を含む暗褐色土層5～8cm、第3層=ローム質黄褐色土層5～8cm、第4層=関東ローム層となっている。本トレンチにおいては、東南端付近に第Ⅰトレンチから続く溝が存在し、この部分が著しく擾乱を受けていた。O点から10.5mと11mの付近に、表土下から関東ローム層にかけて小型の溝状の掘込みがあつたが、これも耕作に伴うものと考えられる。また2mと4.8mの地点を中心に、関東ローム層中に黄褐色の落込み部分（第2図(1)(2)）が存在したが、性質は不明である。第Ⅱトレンチにおいては明確に遺構と認め得るものはなかった。

遺物（図版4—1・2）

第Ⅰトレンチと同様に遺物はきわめて少ない。本トレンチ南端の表土下から出土した小銅鏡を除けば、表土、暗褐色土および擾乱部から勝板式土器、加曾利EⅡ式土器、壺ノ内I式土器、前野町式土器の破片少數と打製石斧破片1、土錘1が出土した程度であって、特記すべきことはない。

土錘は加曾利EⅠ式土器の破片を加工したものである。

小銅鏡（図版4—1・2）は縁の6分の5を欠くが、欠損はごく小部分に限られている。推定直径5.6cm。鏡面は僅かに反りをもつ。紐はやや偏平な感を帯びた円紐で直径1.4cm、高さ0.4cm。紐穴は幅0.6cm、高さ0.3cmで断面が偏円形を呈する。紐の外側に細い三重の縁があり、その外側に放射状の櫛齒文帯がめぐり、ほとんど段差をもたずに幅1.2cmの平縁へ続く。

内区と縁の厚さは認め難いぐらいである。縁結が全面に生じており、保存状態は決して良好と言えない。なお、縁の欠損は人為的な破碎の形跡がなく、腐蝕と埋没中、移動によって生じたものと考えられる。

5. 結　　び

梶山遺跡第4次調査の概要は以上に述べた通りである。

今回の調査では21号住居址、22号住居址の存在が知られたことにより、台地東南側緩斜面にも住居が建設されていることが明らかになった。集落址のうち住居部分の範囲は当初予想した以上に拡がるものと思われるが、21号住居址、22号住居址より下の斜面には、傾斜の状態からみて住居址の存在は考えにくい。

21号住居址は、これまでの調査で台地上面平坦部から発見された五領期の住居址（1号・4号・9号住居址）が一辺約5mの正方形を呈するのに対し、一辺約3.6mにすぎず、きわめて小型である点が注意される。また4個の主柱穴以外に東南側斜面に接し、2個の大きな柱穴が存在したことは疑問の余地がない程度で、これらの点において、他の住居址と著しく異なるが、緩斜面に立地するという特殊な事情によるものであろう。

22号住居址については、ごく一部の発掘に止まつたため詳細は不明である。時期は出土土器の型式的特徴から前野町期に比定してよいと思われる。この地域における同期の住居址の発見例はきわめて少ない。

IIトレンチから出土した小銅鏡は、造形に伴う出土例ではないため、直接時期を決定し難い。しかし小銅鏡自体の示す特徴は、古墳時代末の退化形というよりも、むしろ近年発見例の増加してきた弥生時代終末期に属する諸例と酷似する。なお検討を要する点が多いが、一応弥生時代終末位に想定して甚だしい誤りはないのではないかと考えられる。

梶山遺跡第1次～4次調査の結果については、更に資料の分析を行ない、一括して報告する必要があるが、諸般の事情で早急に実現し難いため将来の課題とし、本稿では第4次調査の結果の概要を述べるだけに止める。

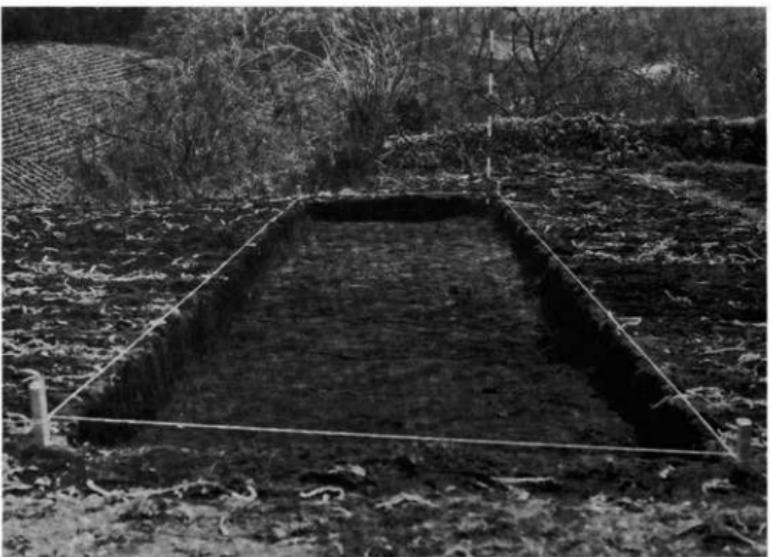
なお、第4次調査のさい谷をへだてた南方の台地上に縄文時代前期の住居址内貝塚を発見し、早急に調査する必要があったので、昭和50年度に発掘調査を実施して、本報告書末尾に予報を掲載した。ただし、50年度調査は日数の関係で、住居址部分に限らざるを得なかった。そこで51年度に引き続き周辺部の補足調査を行なった。詳細については補足調査の結果とともに神奈川県立博物館発掘調査報告書第11号で報告する予定である。

注

- 神澤勇一「梶山遺跡(1)」神奈川県立博物館発掘調査報告書 第1号 神奈川県立博物館 1968年
- 神澤勇一「梶山遺跡(2)」神奈川県立博物館発掘調査報告書 第2号 神奈川県立博物館 1969年
- 神澤勇一「梶山遺跡(3)」神奈川県立博物館発掘調査報告書 第4号 神奈川県立博物館 1970年



1 第Ⅰトレンチ全景



2 第Ⅱトレンチ全景



1 21号住居址(南方より)



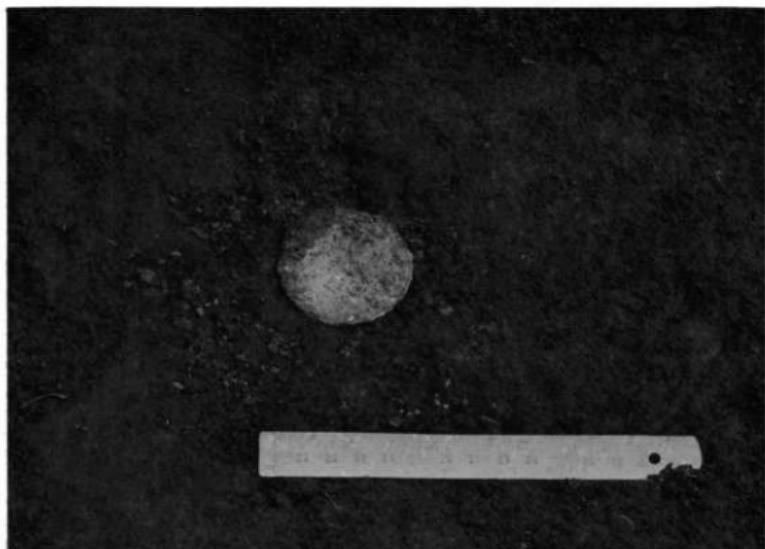
2 21号住居址(北方より)



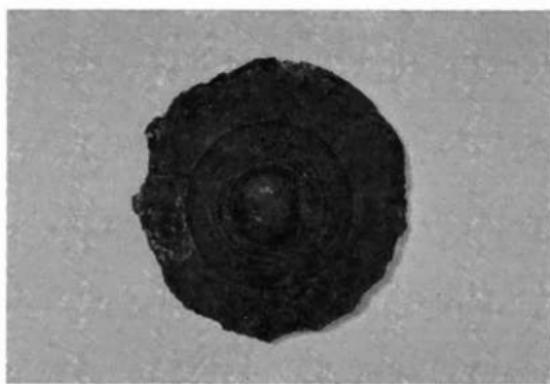
1 塬形土器出土状态 (21号住居址)



2 高环形土器出土状态 (21号住居址)



1 小銅鏡出土状態(第IIトレンチ)



2 小銅鏡断面拡大図(実寸法直径5.6cm)



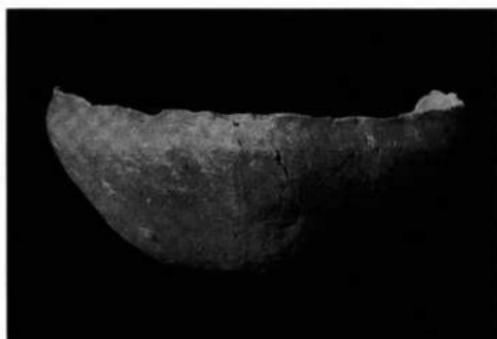
1 台付鉢形土器（22号住居址）



2 高坏形土器（21号住居址）



1 台付鉢形土器
(22号住居址)



2 壺形土器
(22号住居址覆土)

横浜市上台遺跡第1次発掘調査予報

目 次

1. 調査概要
2. 上台遺跡付近地形図（挿図） 14
3. 1号住居址実測図（挿図） 16
4. 1号住居址内貝塚堆積状態・1号住居址（図版）

調査主催者 神奈川県立博物館長
高橋繁成

発掘担当者 神奈川県立博物館主任学者員
神澤勇一

調査期日 昭和51年3月1日～10日

報告書執筆 神澤勇一・川口徳治郎

横浜市上台遺跡第1次発掘調査予報

調査の概要

昭和50年3月、横浜市堤山遺跡（鶴見区上末吉所在）第4次調査を実施したさい、三角点を求めて同遺跡の南に存在する上台と呼ぶ台地に赴いたところ、開墾中の畑の一帯に貝塚を発見した。付近の地表には縄文式土器（茅山式土器？・黒浜式土器）、弥生式土器または土師式土器の破片が散在し、特に縄文式土器の分布が多かった。露出した貝層はごく小規模で、形状ならびに包含されている土器から縄文時代前期の住居址内貝塚と考えられた。

幸い耕作者金子直司、地主横山義雄氏のご協力があり、その地点の開墾作業の一時中止と発掘調査について快諾を得られたので、翌昭和51年3月1日から3月10日まで延10日間にわたり調査を実施した。

その結果、黒浜期の住居址内貝塚1個発掘したほか、夏島式土器の遺物包含層の存在を確かめることができたのである。しかし、日程の関係ではとんと住居址部分しか調査できず、昭和52年3月に周辺部の補足調査を実施することにした。第1次調査の詳細については第2次調査の所見をまとめて報告する予定であるが、結果が良好であったので、予報として簡単に概要を紹介しておきたい。

本調査にあたり、金子直司氏、横山義雄氏、明治大学・国学院大学・立正大学・青山学院大学の学生ならびに卒業生諸君から多大のご協力を賜わった。記るして厚く感謝の意を表する次第である。

占地・層序（第1図）

上台遺跡は横浜市鶴見区上末吉1丁目921番地にあり、ほぼ南北に伸びた細長い海蝕台地の東側縁が、幅約100m、長さ約80mほど半島状に突出した部分に位置している。標高は約42mをはかる。調査地点はその先端中央付近で、住居址を中心に、畑地から開墾予定地にかけ延約70m²の範囲を発掘した。

層序は表土（耕作土・腐植土）20~35cm、暗褐色土20~25cm、ローム質黄褐色土層10~15cm、関東ローム層の堆積を示す。ただし、東側へ行くと暗褐色土とローム質黄褐色土の間にやや黒味を帯びた黄褐色粘質土の薄い層が入るらしいが、今回の発掘部分では確かめられなかつた。



第1図 上台遺跡付近地形図 (1:2500)

住居址（図版（下）第2図）

平面 $3.9 \times 4.1m$ ではほぼ正方形を呈するやや小型の住居址で、主軸は北東—南西方向にある。覆土の落込みはローム質黄褐色土層上面から認められた。床面は関東ローム層を掘り込んでいるが、部分的に幾分軟弱なところもあり、局溝を欠く。

主柱穴は主軸にそって2個認められたが、床面に存在するそれ以外のビットは深さ10~20cm程度できわめて浅く、うち柱穴と認め得るものはP3~P7だけで、配置も不揃いである。

住居址外の北隅に2個のビットが存在したが性質は明らかでない。

床面の三個所に焼土が認められたが、このうち炉址は北東壁寄りのもので、 $35 \times 40cm$ をはかる。覆土の状態は第2図A-B断面実測図に示したとおりで、下から黄褐色粘質土、混土貝層、有機物を多量に含む黒色土となっている。黄褐色粘質土は断面皿状に堆積し、東南側壁付近に多い。この層は遺物を全く包含しない。

貝層の状態（図版（上））

貝塚はハマグリを主体とする混土貝層で、住居址の北西側半分にブロック状をなして（ほぼ3個に大別できる）堆積し（図版（上））、貝の量は全体で約 $2m^3$ である。ハマグリ、チョウセンハマグリ、カガミガイ、ハイガイ、サルボウ、シオフキ、アサリ、オキシジミ、マガキの6種類が認められたが、ハマグリとチョウセンハマグリが80%以上を占める。なお魚骨は検出できなかった。

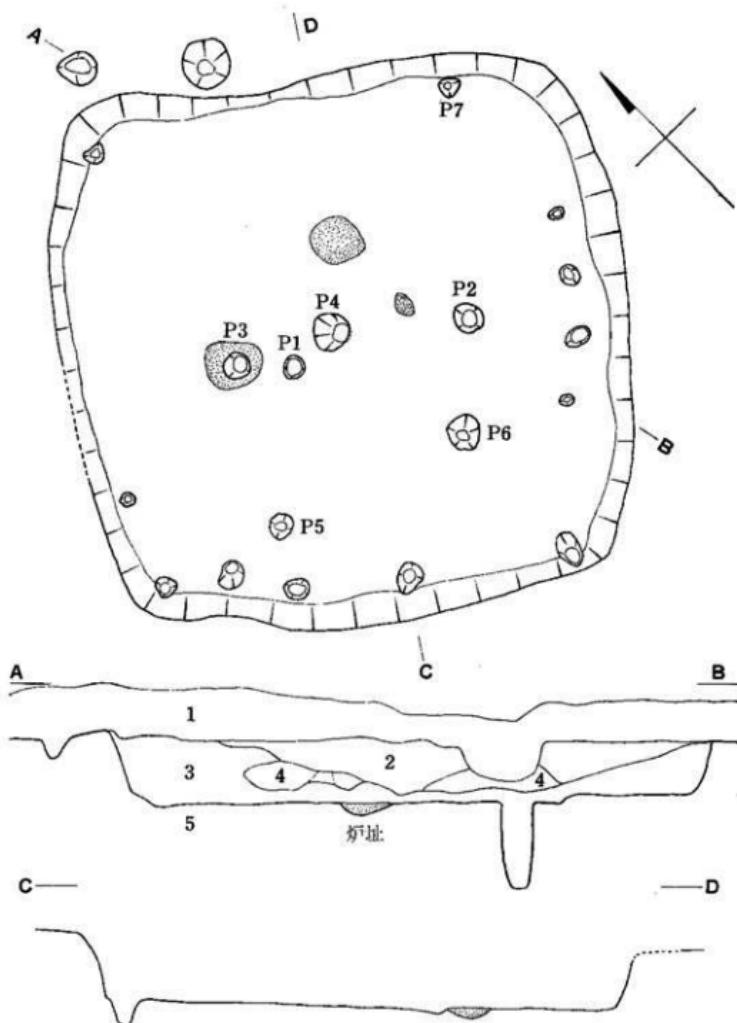
遺物

遺物は表土、暗褐色土層、黒色土および混土貝層中から出土した。

住居址覆土から出土した遺物……主として混土貝層中から出土し、土器破片が大部分を占めるが量は少ない。土器はいずれも胎土中にかなり多量の纖維を含み、粗い单節または無節の斜行繩文と羽状繩文が主体をなす。異条斜繩文を施したもの、繩文を地文とし結節沈線文、粗雑な条線文を施したもの、貝紋を付けたものもみられる。完形品はないが、器形、文様構成からみて、すべて黒浜式土器に比定されるべきものである。

土器以外では、礫器・輕石製浮子等数個が出土した程度であった。

住居址覆土以外から出土した遺物……表土および暗褐色土層中から茅山式土器？、黒浜式土器、赤生式土器（型式不明）の小片が數十片、散漫に出土したにすぎない。ただ、住居址東側の部分において、暗褐色土層下部からローム質黄褐色土の一部にかけ、縦走する繩文および撚糸文をもつ土器が十数片している。文様及び口縁部断面の形状からみて、夏島式に比定できる。



1 = 暗褐色土 2 = 黑色土 3 = 暗褐色粘质土 4 = 混土貝屑 5 = 関東口一ム層

0

3M

第2図 1号住居址実測図

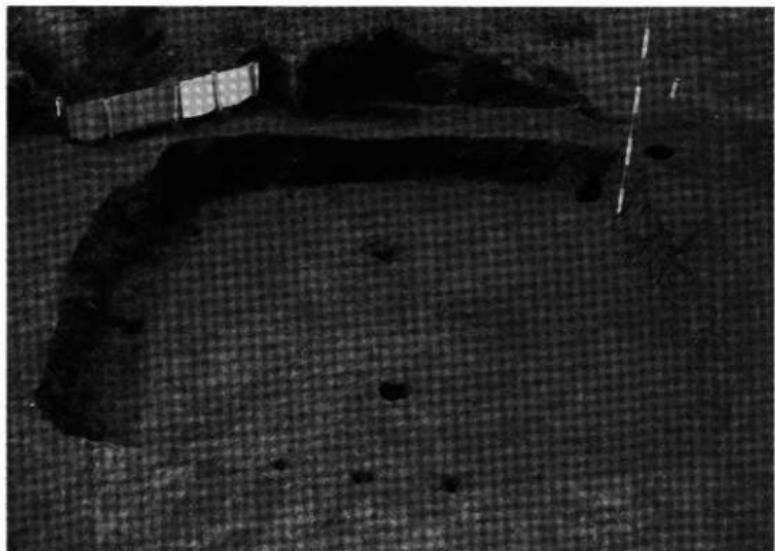
結　　び

上台遺跡第1次調査の概要は以上のとおりである。竪穴住居址については、床面に附着した土器の出土を欠くため直接時期を決定し難い。しかし、若干の黄褐色粘質土の堆積があると言え、貝層および覆土中からの出土土器が黒浜式土器に限られており、竪穴の形状からも同期のものとして誤りないであろう。

住居址東側から、夏島式土器の小破片の出土をみたが、それらは上台周辺では初めての例である。



A 1号住居址内貝塚堆積状態



B 1号住居址

昭和 52 年 3 月 25 日 印刷
昭和 52 年 3 月 31 日 発行

編集者兼発行者
神奈川県立博物館
北林一光
横浜市中区南仲通 5 の 60

印刷所 特平井印刷所